

「論証型反論」の研究とその実践

－「伝え合う力」を高める意見文指導のために－

国語科 倉井 誠

1 はじめに

学習指導要領の国語科の目標に、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」とある。能力としての「伝え合う力」が新たに付け加わったわけであるが、これを受けて文部省（現文部科学省）『中学校学習指導要領解説・国語編』では、この力を「適切に表現する能力と正確に理解する能力とを基盤に、人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言語によって伝え合う力のこと」と解説している。

言葉は、他者とのコミュニケーションのための手段・道具であり、人と人とを結びつける働きを持つ。人間関係が希薄化している現代社会において、コミュニケーションの能力を根底で支えるものは言葉であり、その言葉のつかい方を育てていくことが国語科の役割として求められている。そのために、自分からの一方的な発信型ではなく、さらに発展して、相手を意識した受信型のコミュニケーションの学習を目指していくことが肝要である。ただ単に表現力の観点からだけではでなく、ものごとを理解することは他者を説得することだという学習観から発想されることが大切になってくるのである。

本稿では、この「伝え合う力」を、本校国語科がこれまでに定義してきた4つの側面のうち、「読み手に伝える技能」（文章表現で、自己表現として、情報や自己の考えを正確に、かつ論理的に伝える力）の育成に焦点をあて、意見文指導の在り方の理論を学び、実践を通しての考察をしたい。

2 研究の内容

(1) 「論証型反論」による意見文指導

「読み手に伝える技能」育成のために、「自分と同じでない意見に対して、きちんと反論できる能力」を身に付けさせていくことが必要である。そこで、「意見文」指導の一方方法として、「論証型反論」の仕方を学習させることは大変意義がある。香西秀信氏は、次のように述べている。

絶えず相手方の論証を検討し、攻撃する習慣を身につけることは、当然ながら、「主張」と「根拠」の関係についての意識を鋭敏にする。そしてそれは、自らが何かを主張する際にも、十分に反論に耐えうるような根拠を提示することにおいて大いに役立つであろうということである。現在の「国語」の時間の中では、議論の指導などに多くの時間を割く余裕はない。したがって、必要最小限度の技術を身につけるためには、「論証」型の反論の訓練に集中するのがもっとも効果的であると考えられるわけである。

(2) 議論の型とそれぞれの「反論」の仕方

香西氏は、議論指導に必要な論法として、次の五つの議論の型、そしてその「反論」の仕方を示している。

ア 議論の型（トポス）

- (ア)「定義」からの議論
- (イ)「類似」からの議論
- (ウ)「譬え」からの議論
- (エ)「比較」からの議論
- (オ)「因果関係」からの議論

イ「反論」の仕方

- (ア)「定義」からの議論への「反論」→その定義を否定する。
- (イ)「類似」からの議論への「反論」→二つの事例間の（本質的）類似性を否定する。
- (ウ)「譬え」からの議論への「反論」→相手の譬えが「不正確」であることを指摘する。また、相手の譬えの中にある表現を借用して切り返す。
- (エ)「比較」からの議論への「反論」→問題となっている二つの事例間の「より」を否定する。その「類似」を否定する方法も可能である。
- (オ)「因果関係」からの議論への「反論」→その因果性を否定する。また、「同じ原因にさらされたものは同じ結果を生み出すはずである」のように変形させ、「同じ原因」が「同じ結果」を生み出していないことを指摘して、その因果関係を否定する。さらに論の具体的な内容ではなく、その論理の枠組みを否定する。

(3)「論証型反論」の特性

香西氏のいう「反論」の二つの型についての説明を要約する。

反論といっても、教材文と反対の主張をさせるのではなく、ポバルニンが『議論』の中で使用している用語「命題をめぐる議論」と「論証をめぐる議論」を少し言い換えて、「主張」型反論と「論証」型反論という用語を用いる。教室における、反論の訓練では、「論証」型の反論のみを認め、「主張」型の反論はさせない。その理由として、第一に、教室の訓練で「主張」型反論を認めると、相手の主張を否定するのではなく、対立するこちらの主張を別の根拠によって並立させるだけで終わってしまい、第二に、「主張」型の反論では、対立点が抽象的な議論に還元されてしまうため、具体的な議論に反論するという姿勢が希薄になってしまうからである。しかし、「論証」型反論も、決して万能ではなく、「論証」型の反論は、相手の論証を否定はするが、相手の主張そのものを否定することはできないし、ましてこちらの主張の正しさを論証するものでもない。

ア「主張」型反論（対「主張」）

相手の主張と反対の主張を論証する。

甲「AはBである。」（例 癌は告知すべきである。なぜなら…。）

↑

互いに「主張」型反論になっている。

↓

乙「AはBではない。」（例 癌は告知すべきでない。なぜなら…。）

問題点… 実質的には、反論ではなく独立した二つの主張が並立するだけで、相手の具体的な議論に反論するという姿勢が希薄になる。

イ「論証」型反論（対「論証」）

相手の主張を支える論証を切り崩す。

甲「AはBである。」

↑「論証」型反論

乙「『AはBである。』とする甲の主張は成り立たない。」(論証に誤りがある)

問題点…「主張」までは切り崩せない。

(4)「論証型反論」指導の具体例(文章は略)

ア「捕鯨」に関する文章に対して、「反論」する。

【判断】「日本は商業捕鯨を再開すべきではない。」

【根拠】・A氏…鯨は高度の知能を持った高等な哺乳類であるから。

・B氏…商業捕鯨の対象となる種類の鯨の数は現在でも減少傾向にあるから。

・C氏…欧米の動物愛護団体の反発を招き、大規模な日本製品の不買運動が、展開される恐れがあるから。

これを、A氏、B氏、C氏の論に対して反論すると、

(7)「主張」型反論では、A氏、B氏、C氏に対して、全て同じ反論になる。つまり、「日本は商業捕鯨を再開すべきである。」となる。

(1)「論証」型反論では、相手の論の具体的な検討を行うために、それぞれ異なった反論になる。

対A←反論

対B←反論

対C←反論

イ「論証」指導に用いる構造図…イギリスの分析哲学者スティーブン・トゥールミンのモデルを利用する。

・「データ」…論証の土台であり、その出発点である。(ここで示される事実は、できれば議論の余地のない明白な「事実」であることが望ましい。)

・「理由づけ」…「データ」と「判断」の橋渡しをするもので、その「データ」、その「判断」を結論づけていることがなぜ妥当であるかをするもの。

・「判断」…自分の考えを決めること。

(※「データ」と「理由づけ」を「根拠」とする。)

3 授業実践と考察

(1) 題材名 『書く2(説得)』『意見を書こう』東京書籍 2年生)

(2) 目 標 (※「書くこと」の領域であるが、「読むこと」の指導も含んでいる。)

国語への関心 意欲・態度	・相手の意見を正確に理解したうえで、自分の立場をはっきりさせた反論文を書こうとする。
B 書くこと	・自分で探した投書記事などへの反論文を、提示した構成で書くことができる。

C 読むこと	・意見を書いた文章を読み、主張の部分とそれを支える根拠の部分を確認して読むことができる。
言語事項	・次の点に注意して、反論文を書くことができる。 説得力のある表現の工夫、語句の意味、言葉の順序や使い方

(3) 指導計画

ア 教科書を読み、反論文を書くことの意義と学習内容について確認する。(1)

イ 意見文を読み、主張の部分とそれを支える根拠の部分を確認する。また「議論の型」とそれぞれの「反論の仕方」について理解する。(1)

ウ 例示された資料の「論証型反論」をし、その反論メモを作る。(1)本時

エ 自分で探した投書記事などへの反論文を、提示した構成で書く。(2)

オ 観点に従い、推敲し清書をする。(1)

(4) 本時の指導(全6時間の3時間目)

ア 目標 意見文の構成を理解し、適切な「論証型反論」メモを書くことができる。

イ 展開

指導事項	学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を知ること。 ・「主張」・「根拠」をもとに、反対の理由を示すこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ①本時の学習内容を知る。 ②新聞の投書を読み、「あおげば尊し」の歌詞を歌い、理解する。 ③投書の「主張」・「根拠」に傍線を引く。 ④「主張」・「根拠」の確認をする。 ⑤「反論」メモを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時は、主張・根拠をもとに、反論メモを作ることを告げる。 ・全員起立させ、「投書」を読ませる。 ・「あおげば尊し」をそのまま全員で歌わせる。 ・「主張」は波線、「根拠」には直線を引かせる。
<ul style="list-style-type: none"> ・次時の学習内容を知ること。 	<ul style="list-style-type: none"> ⑥次時の学習活動を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・反対の理由をノートに書き出し、「反論」メモを作ることを指示する。 ・単語を断片的に羅列するのではなく、文としての形に整えて書くように指示する。 ・本時にノートに書いた反対の理由をもとに、反論の文章を書くことを告げる。

ウ 評価 意見文の「根拠」(「理由づけ」)に対して、適切な「論証型反論」メモを

書くことができたか。

(資料) ～歌の意味理解して～ (読売新聞投書, 1995, 3, 10)

高校教師 山本 智彦 35歳(名古屋市)

卒業式には、「蛍の光」と「仰げば尊し」が当たり前のように歌われているが、数年前に三年生の担任だった時、生徒達を指導していて疑問に思った。

「仰げば尊し」は、お世話になった先生に感謝する歌だ。生徒達が自発的に歌うのならよいが、学校側が決めて教師がしっかり歌うよう強要するのは何ともこっけいな話ではないか。歌詞の意味をきちんと理解したうえでの指導だろうか。

あおげば尊し

作詞者不詳

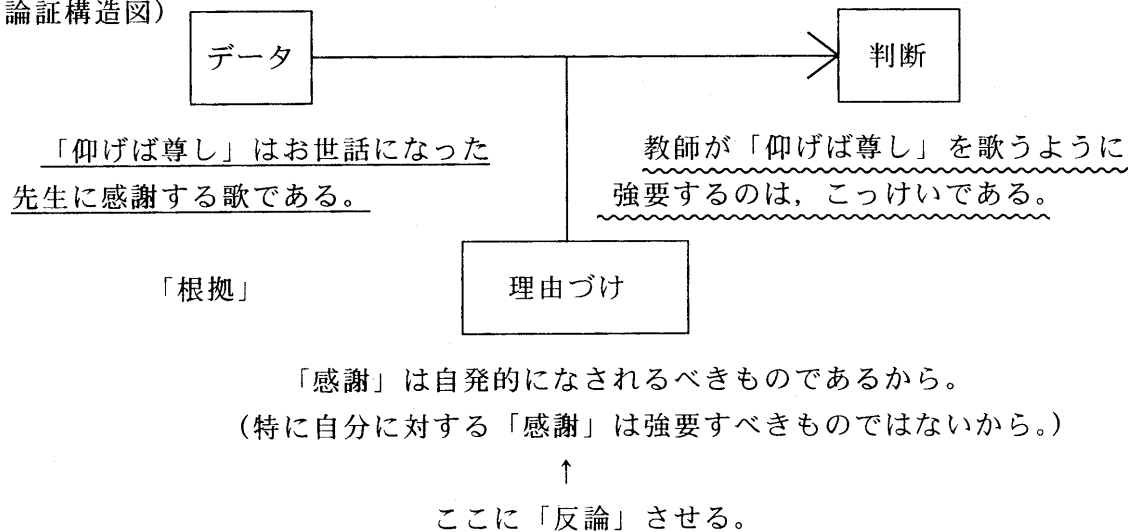
あおげばとうとし わが師の恩

教えの庭にも はやいくとせ

おもえばいと疾し このとし月

今こそわかれめ いざさらば

(論証構造図)



「論証型反論」メモの例

- ①もし、この理由で「仰げば尊し」に反対するのであれば、「答辞」・「記念品贈呈」はどうなるのだろうか。(「類似からの議論」への反論)
- ②言葉を用いて、感謝することを教えるのは、教育活動の一環である。
- ③式歌の性格として、歌詞の直接的な内容は問題ではない。(例えば、「お経」など。)
- ④生徒には、自発的に「感謝」の気持ちを抱き、歌っている生徒も少なくはない。
- ⑤この歌詞は一番のみの見解であり、二・三番は先生に感謝するという意だけでない。
- ⑥「師」は直接的な教師のみを指すとは限らない。

エ 留意点

香西氏は、「教材文の条件」、「方法」、「反論の注意点」を次のように指摘している。

(7) 教材文の条件

- ①主張が明快である。
- ②その主張を支える根拠がきちんと書かれている。言い換えれば、論証されている。
- ③ディベートの論題のように短いものではなく、ある程度の長さをもっている。
- ④論じるのに、特殊な専門的知識を必要としない。
- ⑤生徒の現在の生活から遊離したものではない。つまり、ディベートのように、無理に議論を捻り出さなくても、日常の関心から、ごく自然に議論に入っていけるような内容をもっている。
- ⑥読み手を刺激し、挑発するような文体で書かれている。(略)できれば、喧嘩を売ってくるような威勢のいい文章の方が望ましい。

(1) 方法

「生徒が実際にはそれに対して賛成であるか反対であるかにかかわらず、反論を考えさせ、書かせることが有効」である。

(ウ) 反論（文）の仕方

①反論すべき箇所は必ず引用し、引用していない部分については反論しない。(相手の発言の背後に存在し、その発言を生み出したであろう価値判断は、反論の対象になる。)

②必ず「第一に」、「第二に」、「第三に」という形式で「反論」する。構成は下記の通りとする。

私は〇〇さんの意見に反対である。
〇〇さんは「
と主張し、その根拠を（理由）として、次のように述べている。
「
しかし、この論理はおかしい。(しかし、この根拠（理由）には疑問がある。)
(なぜなら～だからである。)
第一に、
第二に、
よって、〇〇さんの根拠（理由づけ）は成り立たない。

(5) 本実践の考察

「論証型反論」による「意見文」指導実践の成果としては、この「自分で探した投書記事などへの反論文を、提示された構成で書く」学習を通して、『意見に』ではなく、『根拠に』対して、意見が言える」ことの大切さがわかり、「意見文」の書き方の一つの型としての技能を習得させることができ、大半の生徒が「今後も生かして行きたい」といった感想を持てたことである。

今後の課題は、更に分かりやすい「論証型反論」の仕方の例示をするため、新聞や雑誌などから中学生に分かりやすい文章を探し教材化していくこと、また実際の指導の中で

は予想できない生徒の反応があり、前もって奥の深い教材研究をし、生徒の模範となる「反論」を考えておくことなどである。

意見文を書くこと No.1

2年(2)組へ

テーマ 卒業式に即後は誰しは受け継ぐべきではない。

私は山本さんの意見に反対である。山本さんは「教師が仰げば背く」を歌うように後継するものは「つげいがある」と主張し、その根拠として感謝は自然的にするものであって後継すべきでない」と述べている。

しかし、この根拠には疑問がある。

第一に、「仰げば背く」の歌詞の中にある「師」とは直接的な教師のみを指すとは限らない。この「師」が指すものは感謝すべき人であってその中には教師だけでなく友人や両親なども含まれるはずである。

第二に、社会的な言葉を用いて感謝することを教えるのは教育活動の一環である。

よって山本さんの根拠は成り立たない。

資料1 (学習プリント)

国語科自己評価表

2年(2)組 番 氏名()

☆ 学習テーマ「意見を書こう」

次の各項目は、授業中の活動や考えについてのものです。この項目をよく読み、あなただけのこの時間の授業中の活動や考えがどうであったかを思い出して、はい・いいえのいずれかで答えてください。

項 目	答 え (どちらかに○)
① この授業で考えたこと、意見を述べることは自分にとって楽しく生き生きとしたものだった。	はい
② この授業でやったこと(「論証型反論」の仕方を知り、新聞の投票などから反論文を書くこと)が、だいたいできた。	はい
③ この授業で、自分なりに考えたり、工夫したりすることができた。	はい
④ この授業に対して、真実に取り組むことができた。	はい
⑤ この授業で、特に当てはめた文章構成の書き方の技能を身に付けることができた。	はい
⑥ この授業でわかったことや考えたことに対して、これから非常に意識し、実際の生活に役立てようと思った。	はい

感想

授業の最後、特に当てはめた文章構成の書き方を「反論文を実際に書いたのが、技能を身に付けていることができた。今後何の反論文を書くとき役立てたいです。」

資料2 (自己評価表)



写真1 (授業の様子)

4 おわりに

最近の中学生の日常の会話の中に、「切れた」とか「むかつく」という言葉を耳にすることが多くなった。また、暴走族の少年などは、自分の考えを言葉でうまく相手に伝えられず、そのもやもやとした気持ちを、爆音やスピードによって、あるいは物に当たったりすることによって、発散させているのであろうか。人間は誰でも自分の考えを他者に伝え、理解して欲しいと思うものであり、今まさに、この「人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言語によって伝え合う力」を育成しなければならないのである。

本稿は、香西秀信氏の著書や講義からその理論を学び、授業実践をし、その一端をまとめたものである。今後は「書くこと」の指導の中で身に付けさせていくばかりではなく、日常の話しことばの指導の中でも継続的に意識して指導していくことが大切であり、特に「聞くこと」の指導の重要性を実感した。それは、これまでみてきたように、「論証型反論」は、相手の主張そのものを否定することはできず、相手の論証の誤りを否定し、反論する技法である。そのためには、まずは相手の話をよく「聞き」、理解しなければなら

※以下の作品は「論証型反論」による反論文ではないが、本校生徒が自主的に地元の新聞社に投稿し掲載されたものである。

[illegible]

「下野新聞」(読者登壇 8月19日)

◇学校に週五日制が導入されてから、授業日数確保のために学校行事が削減されています。

◇先月、私の学校では合唱コンクールがありました。本番当日まで、ここには書ききれないほどのいみじい出来事がありました。練習に参加せずに遊ぶ男子。それを見て、ついに私は泣かだしてまう女子までいました。ただ、その合唱コンクールは、私たちがクラスにとつて無駄ではなかったと思います。たくさん男の子は、クララに欠けていたのを発見するところができたからです。

◇普段の授業も大切です。でも、ただ静かに先生の話を聞いているだけで十分なのでしょうか。私はそうは思いません。授業だけでは学ぶことのできない大切なことを、みんなが協力して行う学校行事は、気付けさせてくれるのです。私はこの投稿を、学校の先生に読んでほしいと思います。そして行事の大切さについて、もっと書いてもらいたいです。

(宇都宮市 二年四組 中学生)

◇最近、私たち中学生がニュースで取り上げられることの二つとして「未成年犯罪」が多いです。テレビ番組や新聞記事ではよく「未成年犯罪の凶悪化・低年齢化」を特集し、犯罪に至った経緯を視聴者に伝えています。では、罪を犯す原因とはいったい何なのでしょうか。

◇私がこれまで耳にしてきたのは、テレビゲームやインターネットが原因である、ということなんです。しかし、私はこれには疑問です。私はゲームやインターネット

以前に、コミュニケーション不足が原因としてあると考えています。

◇携帯電話が普及し、人と面と向かって会話をする時間が減り、気持ちを伝える機会がなくなっています。会話は人の心情を理解する手早い手段です。会話を繰り返していれば、犯罪を未然に防ぐこともできるかもしれません。皆さん、少しでもいいので、人と話す時間を取ってあげてくださいようか。

(手塚富市 初中学生)

– 25 –